

健康度を構成する諸因子について

——健康優良児調査より——

米田幸雄・門脇一郎

Sachio YONEDA and Ichiro KADOWAKI:

About the Factors for Healthful Living

——From the survey of physically perfect children——

Received August 17, 1964

目次

- 1 はじめに
 - 2 調査方法及び調査結果
 - 3 総括並びに考察
 - 4 むすび
- 文献, 資料

1 はじめに

学童に限らず人間の健康評価には身体面, 精神面, 社会面にわたる各種評価, 或は, これらを総合した評価など様々あって健康状態を構成する因子は多種多様にわたっている。評価者がどれに重点をおくか, 或いは, 何れを採用し, 何れを採用しないかによってもその評価は変わってくる。即ち, 健康観を異にする各人によって評価は異なるのである。我々は現在, 漠然と用いられている健康指標が一見, 多岐にわたっているように見えてもその構造に於て同じものの重複にすぎないのではないか, 或は, 健康の理想像を把握するためにはどのような因子を加えるべきかについて検討している。

この報告の資料は昭和37年度の京都府下の健康優良児を決めるために京都府下の各小学校より6学年児童男女各1名を推薦し, 個人についての記録を集めた健康優良児個人票原簿である。選抜された各児童の所属する小学校6学年の在籍人員は表1に示すように京都市内(以下, 市内と略す)と京都市内を除く府下(以下, 府下と略す)とでは異なるが, 対象集団は各小学校の中で健康状態が最も優れていると評価された児童で構成されている。

今回の報告は選抜に当って拠り所とした健康指標の各項目についてこの集団の実態を紹介し, 健康優良児として推薦されたものがどのような枠内にあるかを概観してみよう。

表1 被推薦児童所属小学校の六学年児童在籍人員

在籍人員	市 内		府下(京都市を除く)	
		%		%
0～49	26	12.4	134	50.3
50～99	30	27.3	93	35.0
100～149	58	40.7	12	2.3
150～199	27	13.0	6	1.9
200～249	38	31.1	5	4.1
250～299	20	9.6	11	1.5
300～349	6	2.9	4	
350～399	4	2.0	0	0.4
400～449			1	
不 明	(2)		(0)	
総 計	209		266	

2 調査方法及び調査結果

調査の対象は京都府下の各小学校から男女各1名を健康優良児と推薦した6学年の児童であって, 市内では男子104名, 女子107名, 計211名, 府下では夫々, 131名, 135名, 計266名, 総計477名である。

健康とは世界保健機構の保健憲章に示されるように「ただ単に病気とか虚弱でないと云うだけでなく, 身体的にも精神的にも社会的にも完全に良好な状態」である。即ち, 例えば体格が良く, 疾病・異常がなくても学業成績が劣るとか, 性格, 或は, 家庭状況が悪くては健康とは云い得ないのである。このような意味で健康に関係があると思われる項目はすべて健康指標としてとり上げた。

即ち, 健康指標として次の項目をとり上げ, 且つ, 分類した。

1) 体格

身長, 体重, 胸囲, 坐高

2) 運動能力

50m走, 立巾とび, ソフトボール投

3) 学習・知能

全教科成績, 体育成績, 知能指数

4) 行動・性格

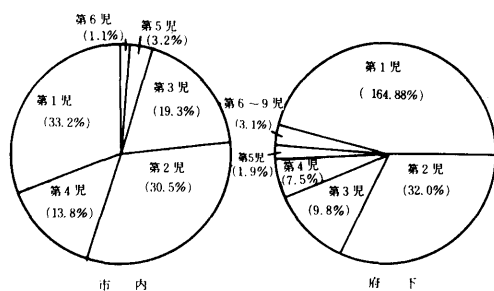
5) 疾病状態

疾病・異常, 未処置う歯数, 疾病欠席日数

6) 家族状況

両親の身長, 体重, 家庭の職業, 親の有無, 同胞数とその死亡数

1) 出生順位 (図1)



出生順位は第1児, 第2児が多く, 全出生に対する比率は何れも30%以上であり, 第3児以下は少く, 高順位となるにつれて減少する。最近の出生率の低下を考慮すると一般に第3児以上の子は少いからこの表の数値から第1児, 第2児に健康のすぐれたものが多いとは断言できない。然し, 対象は昭和25年, 26年の出生児であり, 当時の全国出生順位別出生比率は第1児第2児ともに約22%であることと後述同胞数の項目とを対照すると第1児, 第2児に健康なものが多いと考えられる。

2) 体格

a) 身長 (表2-a)

身長は市内では男子が150.6cm, 女子が152.2cm, 府下では夫々, 147.3cm, 150.0cmである。

男女別には両地域ともに女子が男子より2cm弱高く地域別には男女ともに市内が府下より2cm強高い。一般に10～12才の年齢層は女子が男子よりも身長の高い時期であり, 又, 郡部は市部よりも身長が低いから前

表2 京都府及び全国, 六学年児童の体位

	身長		体重		胸囲		坐高		検査人員	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
市内	137.7	137.4	31.4	31.9	66.6	66.7	70.8	76.2	7,575	7,132
府下	139.4	140.8	32.1	33.5	67.0	67.2	75.5	77.3	11,000	10,471
京都府全部	138.7	139.4	31.8	32.8	66.8	67.0	73.6	76.9	18,575	17,603
全国	137.1	138.9	31.2	32.8	66.4		74.6	66.6		

記の数値は特異のことからではない。しかし, 表2⁽²⁾に示す一般の6学年児童と較べると男女とも10cm以上高い。

表2-a 身長

cm	市内		府下	
	男子	女子	男子	女子
165 ~ 169	1			
160 ~ 164	5	4	2	3
155 ~ 159	15	25	8	12
150 ~ 154	29	46	32	55
145 ~ 149	43	27	42	41
140 ~ 144	8	4	35	20
135 ~ 139	3	0	12	4
130 ~ 134		1		
総計	104	107	131	135
$\bar{x}$	150.6	152.2	147.3	150.0
δ	5.630	4.848	5.630	4.903

b) 体重 (表2-b)

体重は市内では男子が42.1kg, 女子が43.9kg, 府下では夫々, 38.6kg, 42.4kgである。体重に於ても女子

が男子より重く, 又, 市内が府下より重い。この傾向は身長と同様に一般児童と較べて特異のことからではない。然し, 府下に於ける男女差が稍々, 大である。表2に示す一般の6学年児童に較べると略々10kg重いが府下の男子の体重だけが稍々, 小である。

表2-b 体重

kg	市内		府下	
	男子	女子	男子	女子
60 ~ 64	1			
55 ~ 59	3	3	1	3
50 ~ 54	4	5	3	8
45 ~ 49	18	41	9	27
40 ~ 44	39	40	28	51
35 ~ 39	32	15	61	38
30 ~ 34	6	2	28	7
25 ~ 20	1	1	1	1
総計	104	107	131	135
$\bar{x}$	42.1	44.0	38.6	42.4
δ	5.472	4.517	5.048	5.479

c) 胸囲 (表2-c)

表2—c 胸囲

cm	市 内		府 下	
	男 子	女 子	男 子	女 子
90 ～ 94				1
85 ～ 89	3	4		2
80 ～ 84	6	13	3	12
75 ～ 79	25	40	23	32
70 ～ 74	50	39	50	61
65 ～ 69	20	10	5	25
60 ～ 64		1	5	2
総 計	104	107	131	135
$\bar{x}$	71.3	75.6	71.3	73.9
δ	4.635	4.888	4.333	5.053

胸囲は市内では男女ともに71.3cmであり、府下では男子が75.6cm、女子が73.9cmで男子が大である。京都府下6学年の胸囲は表2にみられるように男女別にも地域別にも大差がなく、約67cmである。即ち、選抜集団児童の胸囲は市内では男女間に差がなく、何れも一般児童より約5cm大である。府下では男子の方が女子より2.0cm弱小であるが一般児童に較べると前者が9.0cm、後者が7.2cm大である。

d) 坐高 (表2—d)

坐高は市内では男子が81.2cm、女子が83.3cm、府下では男子が79.3cm、女子が81.7cmで身長と同様な傾向である。即ち、女子が男子よりも、又、市内が府下よりも何れも大である。一般児童と比較対照すると何れも5cm以上、大である。

表2—d 坐高

cm	市 内		府 下	
	男 子	女 子	男 子	女 子
85 ～ 89	14	27	6	23
80 ～ 84	49	71	41	73
75 ～ 79	40	9	79	35
70 ～ 74	1		5	4
総 計	104	107	131	135
$\bar{x}$	81.2	83.3	79.3	81.8
δ	3.500	2.789	3.176	3.643

3) 運動能力

a) 50m走の所要時間 (表3—a)

市内では男子が8.3秒、女子が8.8秒であり、府下では夫々、8.3秒、8.7秒である。男女間の相違は認めるが、市内と府下とは大差がない。昭和34年度に施行された全国の6学年児童の平均所要時間は男子が9.1秒、女子が9.5秒であり、選抜児童の記録はこれに較べると0.7～0.8秒速い。

表3—a 50m走

秒	市 内		府 下	
	男 子	女 子	男 子	女 子
110 ～ 114		2		
105 ～ 109	1			
100 ～ 104	1			2
95 ～ 99	2	5		7
90 ～ 94	6	27	10	26
85 ～ 89	21	39	33	55
80 ～ 84	44	28	59	40
75 ～ 79	24	4	20	5
70 ～ 74	2		7	
65 ～ 69	2			
総 計	103	129	105	135
$\bar{x}$	83.2	88.0	83.2	87.4
δ	6.016	5.798	4.805	4.960

b) ソフトボール投 (表3—b)

市内では男子が39.0m、女子が25.7m、府下では男子が36.9m、女子が25.0mである。何れの地域にあってもこの種目は男女間の能力差が大であり、地域別には市内のものの記録がまさり、男子に於て著しい。昭和34年度6学年児童の平均記録は男子が28.1m、女子が17.0mであって何れも約8m大である。

表3—b ボール投げ

m	市 内		府 下	
	男 子	女 子	男 子	女 子
60 ～ 65	2			
55 ～ 59	2		3	1
50 ～ 54	7		6	1
45 ～ 49	15		12	19
40 ～ 44	29	3	38	47
35 ～ 39	36	6	35	46
30 ～ 34	9	15	26	15
25 ～ 29	3	25	6	6
20 ～ 24		38		
15 ～ 19		16		
10 ～ 14		1		
総 計	104	107	131	135
$\bar{x}$	39.0	25.7	36.9	24.9
δ	6.758	6.307	6.522	5.295

c) 立巾とび (表3—c)

市内では男子が207.3cm、女子が190.0cm、府下では夫々、191.2cm、180.2cmであり、男子が女子よりも、又、市内が府下より大である。

昭和34年度6学年児童の平均記録は男子が170.3cm、女子が154.6cmであって、これと較べると男子では市内が32.0cm、府下が35.4cm、女子では夫々、20.9cm、

25.6cm大である。

表3—c 立幅とび

m	市 内		府 下	
	男 子	女 子	男 子	女 子
3.0 ~ 3.1	2			
2.8 ~ 2.9				
2.6 ~ 2.7		1		
2.4 ~ 2.5	2	1	1	
2.2 ~ 2.3	15	0	6	2
2.0 ~ 2.1	47	26	34	11
1.8 ~ 1.9	33	47	60	59
1.6 ~ 1.7	5	27	24	49
1.4 ~ 1.5		3		12
1.2 ~ 1.3				1
1.0 ~ 1.1			3	
0.8 ~ 0.9			1	1
総 計	104	105	129	135
$\bar{x}$	2.1	1.9	1.9	1.8
δ	0.220	0.186	0.212	0.187

4) 学習・知能

a) 全教科成績 (表4—a)

各人について国語，社会，算数，理科，音楽，図画工作，体育の8教科の成績の合計点を求め，満点，即

表4—a 全教全教科成長

減 点 数	市 内		府 下	
	男 子	女 子	男 子	女 子
		%		%
0	4	3.8	3	2.8
1	7	6.7	11	10.3
2	8	7.7	8	7.5
3	5	4.8	12	11.2
4	9	8.7	6	5.6
5	10	9.6	11	10.3
6	12	11.5	7	6.5
7	8	7.7	13	12.2
8	9	8.7	6	5.6
9	2	2.0	9	8.4
10	11	10.6	5	4.7
11	7	6.7	5	4.7
12	3	2.9	3	2.8
13	3	2.9	4	3.7
14	2	1.9	3	2.8
15	1	1.0	0	
16	1	1.0	1	0.9
17	1	1.0	0	
18	1	1.0	0	
総計	104		107	
$\bar{x}$	6.7		6.1	
δ				

ち，40から合計点を減じた点数を算出し，その度数と比率とを求めた。平均減点数は地域別にも男女別にも何れも6点前後で成績の良いものが選ばれている。然し，詳細に検討すると女子は男子よりも，又，府下は市内よりも減点数が少い。減点数6とは2点以下がないと仮定すると5点が少くとも2以上，3点が多くとも3以下でかなり成績のすぐれたものである。

b) 体育成績 (表4—b)

体育の平均点は4以上であり，男子は女子よりも，又，市内は府下よりも成績がすぐれている。

表4—b 体育成績

点 数	市 内		府 下	
	男 子	女 子	男 子	女 子
		%		%
5	52	50.0	47	43.9
4	39	37.5	39	36.4
3	12	11.5	21	19.6
2	1	1.0	0	0
1	0		0	0
総計	104		107	
$\bar{x}$	4.5		4.2	
δ				

c) 知能検査 (表4—c)

知能指数の求め方は各小学校に於て，3種類にわたって方式が異っていたが一括平均すると市内男子118，同女子106，府下男子119，同女子115であって知能水準は優良であると考えられる。

表4—c 知能指数

I.Q	市 内		府 下	
	男 子	女 子	男 子	女 子
190 ~ 199			1	
140 ~ 149	4			3
130 ~ 139	13	1	3	10
120 ~ 129	35	4	15	28
110 ~ 119	25	11	18	33
100 ~ 109	16	78	40	20
90 ~ 99	4	8	20	13
80 ~ 89	3		15	3
70 ~ 79	0		2	
60 ~ 69	2			
総 計	102	102	114	110
$\bar{x}$	118.0	106.4	119.4	115.2
δ	14.869	6.454	13.206	13.341

5) 行動・性格 (表5—a，表5—b)

行動・性格については基礎的生活習慣，自主性，責任感，根気強さ，自省心，向上心，公正さ，指導性，

表5-a 行動性格合計点数

点 数	市 内				府 下			
	男 子		女 子		男 子		女 子	
		%		%		%		%
26	8	7.7	14	13.1	5	3.8	14	10.4
25	14	13.5	10	9.3	11	8.4	14	10.4
23	10	9.6	17	15.9	10	7.6	19	14.1
21	10	9.6	16	15.0	20	15.3	15	11.1
19	13	12.5	21	19.6	15	11.5	22	16.3
17	18	17.3	13	12.2	26	19.6	22	16.3
15	14	13.5	8	7.5	21	16.0	19	14.1
13	16	15.4	7	6.5	22	16.8	11	8.1
11	0	0	1	0.9	1	0.8	0	
9	1	1.0	0		0		0	
総計	104		107		131		135	
$\bar{x}$	19.1		20.5		18.3		20.0	

協調性、同情心、公共心、積極性、情緒の安定など13項目にわたる3段階評価、即ちA、B、Cを夫々、2点、1点、0点としてその合計点を求め、平均値と比率とを算出し、又、AとCとの数を問題とした。平均合計点数は市内では男子が19.1、女子が20.5、府下では夫々、18.3、20.0で何れも19点前後であり、女子が男子より、市内が府下より点数が大である傾向である。又、Aの数は平均してこの順序に5.9、7.1、4.9、6.4であり、cの数は同じく0.15、0.01、0.05、0.02、であって全体として合計点数の場合と同様に行動・性格は市内の方が、又、女子の方がすぐれている傾向である。

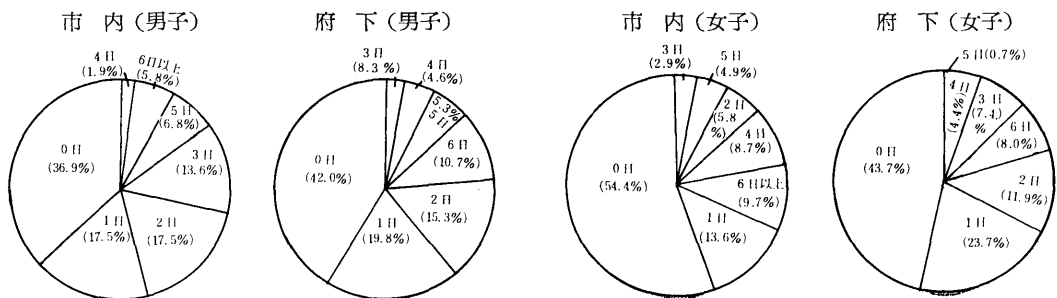
表5-b 行動性格 A 及び C の 数

数	市 内								府 下							
	男 子				女 子				男 子				女 子			
	Aの数	%	Cの数	%	Aの数	%	Cの数	%	Aの数	%	Cの数	%	Aの数	%	Cの数	%
13	8	7.7			14	13.0			5	3.8			14	10.4		
12	7	6.7			7	6.5			7	5.3			3	2.2		
11	8	7.7			3	2.8			4	3.0			11	8.1		
10	6	5.8			7	6.5			3	2.3			9	6.7		
9	3	2.9			10	9.3			7	5.3			10	7.4		
8	4	3.8			7	6.5			7	5.3			8	5.9		
7	5	4.8			9	8.4			13	9.9			9	6.7		
6	6	5.8			10	9.3			5	3.8			11	8.1		
5	8	7.7	1	1.0	11	10.3			11	8.4			11	8.1		
4	7	6.7			10	9.3	1	1.0	13	9.9			14	10.4		
3	12	11.5			4	3.7			12	9.2			7	5.2		
2	9	8.7			6	5.6			14	10.7	2	1.5	11	8.1		
1	8	7.7	10	9.7	3	2.8	2	1.9	9	6.9	3	2.3	8	5.9	2	1.5
0	13	12.5	92	89.3	6	5.6	101	97.1	21	16.0	126		9	6.7	1.3	98.5
総 計	104		103		107		104		131		131		135		313	
$\bar{x}$	5.9		0.1		7.1		0.1		4.9		8.1		6.5		0.0	

6) 疾病

a) 病気欠席日数 (図2-a)

図2-a 病 欠 日 数



平均病欠欠席日数は市内では男子が1.8日、女子が1.3日、府下では夫々、2.0日、1.6日である。欠席日数別には欠席日数0のものが最も多く、この順序に夫々、36.9%、54.4%、42.0%、43.7%であり、欠席日数1日までのものは夫々、54.4%、68.0%、61.8%、67.4%であって男子よりも女子の方が欠席日数が少く特に市内に於て両者の差が著しい。又、地域的には女子では大差を認めないが男子では市内の欠席日数が少ない。

b) 病欠・異常 (表6)

昭和37年度児童生徒健康診断集計の京都府6学年児童の疾病異常患者数および被患率と較べると本集団の疾病異常は種類も数も極めて少ない。

身体状況として疾病・異常のないものは市内の男子では90.4%、女子では96.3%、府下の男子では93.1%、女子では95.6%で、比較的男子の方に疾病・異常を多く認める。この疾病・異常は市内にあっては栄養関係の異常、府下には寄生虫症、耳鼻咽喉の疾患である。

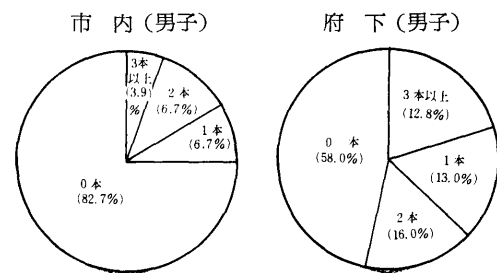
表6 疾病異常

疾 病 異 常	市 内		府 下	
	男 子	女 子	男 子	女 子
	%	%	%	%
栄 養	94 90.4	103 96.3	122 93.1	129 95.6
脊 柱	10 9.6	3 2.8		
胸 廊		1 0.9		
鼻 咽			3 2.3	2 1.5
皮 膚				
眼			1 0.8	1 0.7
耳				
寄 生 虫			5 3.8	3 2.2
歯(う歯を除)				
総 計	104	107	131	135

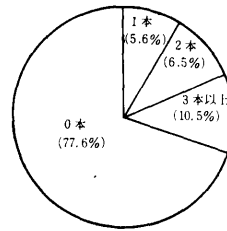
c) 未処置う歯 (図2—b)

未処置う歯を有するものは市内では男子が17.3%、女子が22.4%、府下では男子が42.0%、女子が44.8%

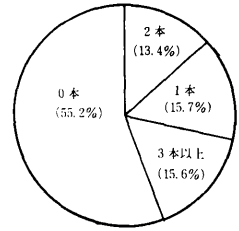
図2—b 未処置う歯数



市 内 (女子)



府 下 (女子)



で市内に少く、府下に多い。

男子別には概して女子に多い傾向である。尚京都府下に於ける6学年児童の有未処置う歯者率は57.4%である。

7) 家族状況

a) 父母の有無とその職業 (表7—a)

父のないものは総計477名中、11名で2.3%、母のないものは5名で1.0%であり、殆ど両親がある。

父母の職業を単純労働、採鉱、農漁林、運輸、サービス、販売、事務、管理的職業、専門技術的職業、無職に分類すると最も多いのは市内では事務で31.4%、府下では農漁林で37.2%である。職業を有する母は市内では20.8%、府下では58.5%であり、職業別には何れも農業が多い。これは家庭が農業、次いで販売業である為の共稼ぎと考えられるのでこれを除去して真の

表7—a 父母の職業 (男女共通)

分 類	父 の 職 業		母 の 職 業	
	市 内	府 下	市 内	府 下
	%	%	%	%
分 類 不 明	(24)	(1)	(1)	(1)
父 母 ナ シ	(8)	(3)	(3)	(0)
無 職	2 1.2	1 0.4	157 79.3	110 41.5
単 純 勞 働	24 14.0	23 8.8	7 3.5	8 3.0
採 鉱	0	0	0	0
農 漁 林	15 8.7	97 37.2	15 7.6	112 42.3
運 輸	5 2.9	14 5.4	0	0
サ ー ビ ス	13 7.6	6 2.3	2 1.0	0
販 売	33 19.2	26 10.0	5 2.5	15 5.7
事 務	54 31.4	57 21.8	5 2.5	8 3.0
管 理 的 職 業	9 5.2	15 5.8	2 1.0	0
専 門 技 術 的 職 業	27 15.7	22 8.4	5 2.5	12 4.5
記 入 ナ シ		(1)	(9)	
総 計	172	261	198	265

意味の共稼ぎの母の比率を求めると市内では10.7%、府下では10.6%である。

b) 父母の身長と体重 (表7—b)

父の身長は市内、府下ともに 166.6cm、体重は市内が63.3kg、府下が61.9kgである。

母の身長は市内が155.6cm, 府下が155.4cm, 体重は市内が53.2kg, 府下が54.6kgである。即ち、両親の身

長・体重は全国の成人の身長、体重総計表からすると比較的大である。

表7—b 父 母 の 身 長, 体 重

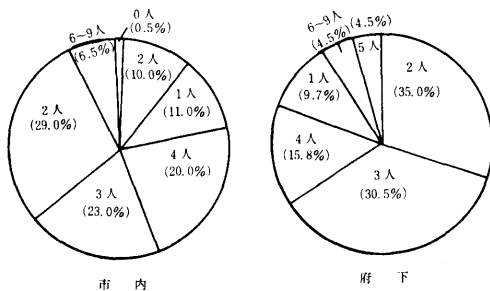
父						母									
身		長		体		重		身		長		体		重	
		市	内	府	下			市	内	府	下	市	内	府	下
187.5~192.4				1		97.5~102.4		1							
182.5~187.4		1		1		92.5~ 97.4		0							
177.5~182.4			13	13		87.5~ 92.4		1	1						
172.5~177.4			44	52		82.5~ 87.4		4	3		3		2	1	
167.5~172.4			59	93		77.5~ 82.4		11	7		9		5	2	
162.5~167.4			65	69		72.5~ 77.4		23	17		26		34	2	1
157.5~162.4			17	29		67.5~ 72.4		32	54		69		92	14	6
152.5~157.4			14	2		62.5~ 67.4		61	67		76		103	22	25
147.5~152.4						57.5~ 62.4		39	69		23		26	44	54
142.5~147.4						52.5~ 57.4		22	37		3		2	57	110
						47.5~ 52.4		7	5					49	54
						42.5~ 47.4		1						15	14
						37.5~ 42.4								1	11
総	計		203	260				202	260		208		264	207	265
$\bar{x}$			166.6	166.6				63.3	61.9		155.6		155.4	53.2	54.6
σ			5.109	5.585				8.363	6.989		5.546		4.879	7.709	6.057

c) 同胞数 (図3)

生存同胞数 (本人を除く) は市内では 3.1人, 府下では 2.9人で略々 3人で同胞数は多い。他方, 1人子は少なく, 全例中 1例認めただけにすぎない。

死亡同胞数は市内が0.27, 府下が0.15で極めて少く又, 死亡同胞のないものが比較的多く, 市内で79.1% 府下で88.3%である。

図3 同胞生存数 (本人を除く)



3 総括並びに考察

本調査の対象は前にも述べたように京都府下の各小学校の6学年の児童から男女各1名あて、健康が最も優れていると選ばれたもので構成されている。各小学校で1人を選び出す単位集団の人員、即ち、6学年児童の在籍人員は 25人~425人にわたっているので選出された児童の健康度は必ずしも一様ではないが健康の優良なものからなる集団と見なすことが出来る。

ここにとりあげた出生順位、体格、運動能力、学習知能、行動・性格、疾病状態、家族状況などは健康度に関係する諸因子であり、その性状を検討することは次のような意味がある。

多くの場合に漠然と概念される健康優良の本質が上述諸因子について数量化され、具体化される。即ち、健康が優良であるか否かを判定する場合に1つの基準とすることができる。又、健康の優良な児童とは具体的に如何なるものであるか、そのような児童をつくりだす基盤はどのようなものであるかがわかるわけである。尤もこれらの因子については重複があり、或は、これだけで充分でないかも知れないがその検討については次報にゆずり、ここでは触れない。

健康優良な者の生存同胞数は本人を含めると平均4人であり、資料は少々古いが昭和32年度の1人の父がもつ子の数は全国平均 2.6人であるから同胞数は比較的多い。即ち、同胞数の少ないものには健康の優良なものが少ないことを示し、同胞により影響される行動性格面が健康度を評価するのに重要な因子であり、又、これが他方面にも影響するのではないかと考えられる。死亡同胞数も極めて少く、出生順位は第1児、第2児など低位のものに多く認められた。

父母の職業は市内と府下とは異り、父の職業は市内では事務職、販売員が多く、府下では農漁林業が多くて特異の事象ではない。母の職業は家庭が農業、販

売業であるために家庭で働くものを除いた真の意味の共稼ぎは市内、府下ともに約10%であり、生活水準は異なるであろうが父の収入だけで生計が成立つ家庭のものに多い。又、両親の揃っているものは総数の99%を占めており、健康優良な子を育成する背景として当然ながら両親が揃っており、貧困ならず、母が家庭にいると云う基盤が要求されるのである。

最近、栄養、生活環境などの改善で一般に学童の体位の向上はめざましいものがある。然し、遺伝的關係も又、さげがたい因子である。体格のすぐれた健康優良児の父母の体格は一般成人の体格よりかなりすぐれている。即ち、身長・体重は市内では父が166.6cm, 63.3kg, 母が155.6cm, 53.2kg, 府下では父が166.6cm 61.9kg, 母が155.4cm, 54.6kgである。

体格及び運動能力は健康優良児童を判定する場合に身体面の重要な因子である。調査結果に示したように健康優良児童の身長、体重、胸囲、坐高の平均値は一般児童に較べて大きく、又、標準偏差を考慮に入れて $\bar{x} \pm 2\sigma$ の範囲が健康優良と判定する場合の枠とすると次のようになる。即ち、

京都市内

	男子	女子
身長	150.6 $\pm$ 11.3cm	152.2 $\pm$ 9.7cm
体重	42.1 $\pm$ 11.5kg	44.0 $\pm$ 9.0kg
胸囲	71.4 $\pm$ 9.3cm	75.6 $\pm$ 9.7cm
坐高	81.2 $\pm$ 7.0cm	83.3 $\pm$ 5.5cm

京都府下

身長	147.3 $\pm$ 11.3cm	150.0 $\pm$ 9.8cm
体重	38.6 $\pm$ 10.1kg	42.4 $\pm$ 11.9kg
胸囲	71.3 $\pm$ 8.7cm	73.9 $\pm$ 10.1cm
坐高	79.3 $\pm$ 6.2cm	81.7 $\pm$ 7.3cm

小学校6学年児童(満11才)にあっては一般に女子が男子より体格が優れる時期に当っており、本例の場合も女子の体格が優れている。又、京都市の児童は府下(京都市を除く)の児童より体位が優れている。

運動能力についても一般の児童よりも記録がすぐれた体格の場合と同様にして枠を求めると次のようになる

京都市内

	男子	女子
50m走	83.2 $\pm$ 12.2秒	88.0 $\pm$ 11.5秒
立巾跳	2.1 $\pm$ 0.4m	1.9 $\pm$ 0.4m
ソフトボール投	39.0 $\pm$ 13.5m	25.7 $\pm$ 12.6m

京都府下

50m走	83.2 $\pm$ 9.6秒	87.4 $\pm$ 9.9秒
立巾跳	1.9 $\pm$ 0.4m	1.8 $\pm$ 0.4m
ソフトボール投	36.9 $\pm$ 13.0m	24.9 $\pm$ 10.5m

国語、社会、算数理科、図画工作、家庭、音楽、体

育など8教科の総合成績は評価点の合計が34点で1教科平均4点以上である。体育の評価については対象の約50%が5点で最も多く3点以下のものは少ない。

小学校の教科成績評価は5段階の相対評価であり、5点が成績のよいものから全員の10%、4点が次の20%、以下、同様に3点が40%、2点が20%、1点が10%と大畔、決められているから健康優良の条件として成績は上位30%以内にあるのがぞましい。

対象児童の知能指数は100をかなり上まわり、知能も又、優良である事を示し、学業成績知能が優良でなければ健康が優良であるとは云えないのである。

基礎的生活習慣、自主性、責任感、根気強さ、自省心、向上心、公正さ、指導性、協調性、同情心、公共心、積極性、情緒の安定など13項目にわたる行動、性格の評価はA、B、Cの3段階の絶対評価であり、対象はCの数が極めて少く、Aの数が大略、半数を占めている。A、B、Cを夫々、2点、1点、0点として合計点を求めると約20点で全体として行動性格面もかなり優れたものであると云える。

疾病・異常があれば他の条件が如何に良好であっても健康優良児ではあり得ないのである。本対象に於ても疾病・異常のあるものは少かったが栄養関係の異常寄生虫症、耳鼻咽喉の疾患など比較的自覚状況の軽いものが少数例を認められた。

う歯のうち、処置う歯については問題はないが未処置う歯は市内で約20%、府下で40%以上もあり、う歯に対する健康上の関心が低いのはまことに遺憾である。

病欠欠席日数は年間0のものが最も多く、欠席日数1日までのものは総数の約60%であり、5日以上休んだものは少かった。

4 むすび

京都府下の各小学校6学年から男女別に最も健康が優良であると選ばれた児童について出生順位、家族状況、体格、運動能力、学習・知能、行動・性格、疾病状態などの調査を行い次の結果を得た。

1) 健康優良児は両親が揃っており、母が共稼ぎせず、父の収入だけで生計が成立つ家庭に多い。又生存同胞数は比較的多く、しかも、出生順位の低いものに多い。

2) 健康優良児は体格、運動能力などの身体面のみならず、学習・知能、行動・性格などの精神面も極めて優秀である。

3) 疾病・病欠欠席日数は少いがう歯・栄養障害、寄生虫症など症状が軽微な疾病・異常のものが含まれ殊に、未処置う歯を有するものが稍々多く見いだされた。

文献，資料

- 1) 厚生の指標，10巻12号，厚生統計協会
昭和38年9月
- 2) 京都府児童生徒健康診断統計表 京都府教育庁
昭和38年3月
- 3) 児童生徒運動能力調査報告書 文部省体育局
昭和35年10月
- 4) 厚生の指標 9巻10号 厚生統計協会
昭和37年9月

Summary

The purpose of this survey is to study a group of boys and girls who are selected from each school in Kyoto Prefecture, being thought to be the physically-perfect children.

The family situation, birth order, physique, learning ability, mental faculties, behavior, characteristics, and

the history of illness are the main subjects to be studied

- 1) In most cases, they have parents alive, and fathers' income is much enough to make their living, and working mother is hardly found. Many of them are born as elder children, having many brothers and sisters alive.
- 2) These children very much exceed in every field, not only in physical motor abilities, but also in learning, mental faculties, behavior, and characteristics.
- 3) Though, illness or absence due to sick are seldom found in them, yet, slight disorders including decayed teeth, under nutrition, and parasitism are found in a few cases. About 50 percent of the children have one or more decayed teeth untreated.